日本中國學會報　第七十二集
二〇二〇年十月十日　發行　抜刷

「猫時計」説に見る中國人の時間意識

金　博男

「猫時計」説に見る中國人の時間意識

金　博男

一　はじめに

明清代の中國において、猫の瞳の形態變化によって時刻を定めるという、「猫眼定時」または「猫眼辨時」とでも稱すべき説が流行した。たとえば、[明]李時珍『本草綱目』(一五七八)卷五十一「猫」の項には、以下のような内容が記されている。

或云、其睛可定時。子、午、卯、酉如一線。寅、申、巳、亥如滿月。辰、戌、丑、未如棗核也[1]。

(あるものは言う。その瞳は時刻を定められると。子午卯酉は一本の線のよう、寅申巳亥は滿月のよう、辰戌丑未は棗の核のようである。)

猫の目が時計の役目を果たすことから、歴史學者の渡部義通氏は、その『猫との對話』(一九六八)において、これを「猫時計」と名付けている[2]。以降、「猫時計」説は主に日本の學者によって取り上げられてきた。たとえば、平岩米吉『猫の歴史と奇話』(一九八五)や今村與志雄『猫談義　今と昔』(一九八六)は、「猫時計」説を紹介している[3]。また、田中貴子『鈴の音が聞こえる　猫の古典文學誌』(二〇〇一)は、主に「猫時計」説における日本での受容に注目している[4]。そして、鶴ケ谷眞一『猫の目に時間を讀む』(二〇〇一)は、中國と日本における「猫時計」説に關する記述を整理し、「猫時計」説を詳細に取り上げている[5]。ただし、「猫時計」説に關する文獻調査はなお十分とは言えず、「猫時計」が果たして中國人に使われていたかどうかについては、それらの先行研究では考察が行われていなかった。そのような問題意識のもと、筆者は別稿において、「猫時計」の使用狀況および清末以降における中國人の「猫時計」説に對する態度を取り上げ、考察を試みた[6]。

しかしながら、「猫時計」説における十二支の配列はいかなる時間意識に基づくものなのか、このもっとも肝心な問題は今なお未解決のままである。この問題に唯一言及しているのは鶴ケ谷氏の論考である。そこで、まずは問題の背景を整理すべく、「猫時計」説成立までの流れを追い、氏の論考の檢討に入ることとしたい。

二　「猫時計」説の成立まで

中國において、猫の瞳の様子を最初に記録したのは、おそらく［唐］段成式『酉陽雜俎』であろう[7]。猫の瞳に關する記述は、その續集卷八「支動」に見られる。

貓、目睛〔旦〕暮圓、及午豎斂如綖[8]。
（猫。目のひとみが、明け方と暮れ方は圓い。正午になると、ひきしまって絲のようになる。）

猫に限らず、動物の瞳孔は光線の量を調整するためのものであるため、光が強いときは縮まり、逆に弱いときは大きくなる。『酉陽雜俎』の記述は、一般的な環境、つまり晴日における觀察に基づいた結果としては、おおむね正しいと言えよう。ただ、當時の人は瞳孔の大きさが變わる原理を知りえないため、猫の瞳の形態變化に氣づいた後、おのずとそれを時刻と關連づけるようになったと考えられる。

『酉陽雜俎』は九世紀の成書後、最初は手抄の形で傳わり、文人の間にかなり流行した[9]。そのことも一因だったかもしれないが、唐代以降、猫の瞳に關する觀察は、じっさいにますます細かくなっていった。［北宋］彭乘『墨客揮犀』卷一には、次の逸話が記されている。

歐陽公嘗得一古畫、牡丹叢其下有一貓、永叔未知其精妙。丞相正肅吳公與歐公家相近、一見曰此正午牡丹也。何以明之、其花披哆而色燥、此日中時花也。貓眼黑精如線、此正午貓眼也。有帶露花則房斂而色澤。貓眼早暮則精圓、正午則如一線耳[10]。
（歐陽脩はかつて一枚の古畫を手に入れた。［繪に］牡丹の叢の下に一匹の猫がいるが、永叔（歐陽脩）はその精妙なるところをわかっていなかった。丞相の正肅吳公（吳育）は歐陽脩と家が近かった。その繪を見ると、これは正午の牡丹だと言った。なぜそれがわかったかというと、その花は開いており、色も乾いている。それは正午の花なのである。猫の目は黒い瞳が線のようになっている。それは正午の猫の目なのである。朝露がついていれば、花は花房が窄まっており、色は潤っている。猫の目は朝夕には圓く、正午には一本の線のようになるのである。）

以降、先行研究に多く言及されているように、『埤雅』や『夢溪筆談』にも、この逸話は記されるようになった。『埤雅』では、猫の瞳の形態變化に關して、次の内容が補足されている。

貓眼早暮則圓、日漸午則狹長、正午則如一線爾[11]。
（猫の目は朝夕には圓く、段々正午に近づくと狹くて長くなり、正午には一本の線のようになる。）

かくして、宋代の記述においては、猫の瞳が朝から晝までの間に、細かく變化するものであることがはっきりと記されるようになった。

時代がくだって、明代になると、猫の瞳に關する記述は、十二時辰の推移と結びつけられるようになる[12]。［明］蔡清（一四五九～一五〇九）『易經蒙引』は、陰陽の變易を説明する際に、猫の目に言及して次のように述べる。

……如象之膽則隨四時所在不同、如貓之目睛則隨十二辰而變、其

理數之微妙有不可盡究詰者[13]。

（象の膽が、四季に伴いその所在が異なるように、猫の目の瞳が、十二時辰に伴い變ずるように、その天理の微妙なること追究し盡くすことができないものがある。）

『易經蒙引』は、十二時辰に應じた猫の瞳の形態を具體的に述べてはいないが、「隨十二辰而變（十二時辰に伴い［形態が］變わる）」という言い方からは、この時點で、猫の目に對する觀察範圍が確實に畫から夜までに廣がっていたことがわかる。ただ、猫の目にせよ、象の膽にせよ、その「觀察」はおそらく事實に基づいたものではなく、あくまでも理學のために持ち出された觀念的なものだったと考えられる。

また、［明］林希元はその『易經存疑』（一五四二）において、『易』「繫辭下」の「觀鳥獸之文」の一文をめぐり、『朱子語類』『易經蒙引』の二書を引いてから次のように述べる。

愚按貓兒眼中黑睛一日隨十二時改變、其歌曰、子午線兮卯酉圓、寅申巳亥如棗核、辰戌丑未杏仁全。消息之理尤明白、此見造化之妙處[14]。

（愚按ずるに、猫の目にある黒い瞳は一日のあいだに十二時辰によって變化する。その歌にこう言う。子午は線となり卯酉は圓い、寅申巳亥は棗の核のよう、辰戌丑未には全き杏仁となる、と。消息の理はなおさら明白で、ここから造化の妙なるところが見える。）

このように、「猫時計」說は明代において、理學者が陰陽や消長を論じる際に、引き合いに出されるようになった。その理由はいかなるものであろうか。

陰陽や消長と言えば、易學には、一年十二月における陰と陽の伸長と減退を規則正しく示す十二消息卦というものがある。これは、前漢末の易學者である孟喜と京房に始まったとされ、陰陽の消長を表す理論として流行した[15]。猫の瞳の變化は、まさにこれと類似的なものだと理學者によって連想されたのかもしれない。

表一　十二消息卦

䷗	䷒	䷡	䷪	䷀	䷫	䷅	䷓	䷖	䷠	䷁	䷢
復	臨	泰	大壯	夬	乾	姤	遯	否	觀	剝	坤

三　「猫時計」說の變遷
――「四分說」から「三分說」へ

ここまで「猫時計」說が文獻上に成立するまでの經緯を追ってきたが、『易經存疑』以降、「猫時計」說の內容は、基本的に口訣といった形で記されてきたものが多い。その口訣は、ふたつのパタンに大別される。ひとつは、『易經存疑』において見られたような、時刻を「子午」「卯酉」「寅申巳亥」「辰戌丑未」四つに分けるパタン（以下、「四分說」と稱する）である。「四分說」の口訣は、明代のほかの書物にも確認できる。たとえば、［明］張鼎思（一五四三～一六〇三）『琅邪代醉編』には、次のようにある。

有人授余占貓睛法、曰子午線兮卯酉圜、辰戌丑未杏仁尖、寅申巳亥棗核樣、此訣千金不易傳最難[16]。

（ある人が猫の瞳を觀察する方法を私に授けた。いわく、子午は線のよう、卯酉は圓い、辰戌丑未は杏仁のように尖がり、寅申巳亥は棗の核のよう、と。この口訣は千金にも易えられず傳えるのはもっとも難しい。）

もうひとつのパタンは、『本草綱目』のように「子午卯酉」「寅申巳亥」「辰戌丑未」三つに分けるものである（以下、「三分說」と稱する）。これは、じっさいに明清代においてもっとも流行したパタンであったと思われる。清末の文人黃漢が編んだ猫の專門書『猫苑』は、三分說を紹介したあとで、「皆見通書、選擇書（すべて通書、選擇書に見られる。[17]）」という按語を付している。

通書というのは、日選びや簡便な占術を中心に、生活の役に立つ情報のほか、あらゆる百科知識を記した便利帳のようなもので、清代においては、身分にかかわらず多くの人に使われていた。[18] 明清代の通書を考察したところ、『古今圖書集成』に收錄されている明代成書の『張果星宗』や、『紅樓夢』などにも登場しているもっともポピュラーな『玉匣記』などには、確かに「猫時計」の口訣が見られ、それらの多くは三分說である。『張果星宗』の「猫眼辨時」の項目の內容を次に示しておく。

子午卯酉一條線、寅申巳亥如鏡圓、辰戌丑未棗核尖、祕訣君知莫亂傳。[19]

（子午卯酉は一本の線のよう、寅申巳亥は鏡のように圓い、辰戌丑未は棗の核のように尖る、祕訣を知ってもむやみに傳えるな。）

通書のほかに、日用類書においても三分說が確認できる。『三台萬用正宗』（卷三）「看猫眼定時法」という項目の內容は次のようにある。

子午卯酉一條線、辰戌丑未棗兒形、寅申巳亥員如鏡、十二時辰爲鉄定。[20]

（子午卯酉は一本の線、辰戌丑未は棗の形、寅申巳亥は圓きこと鏡のごとし、十二時辰は鐵のように定まる。）

さらに蘇州評彈『玉蜻蜓』[21] ないし民國期における雜誌や新聞において、「猫時計」說に言及する記事や小說なども、主に三分說を引いている。[22] 三分說の例は枚擧にいとまがないが、乾隆帝の下で作られた動物圖譜『獸譜』では、猫について、次のように記述している。

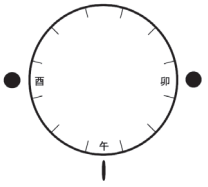
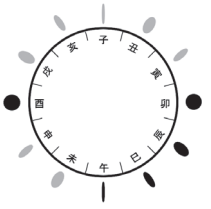
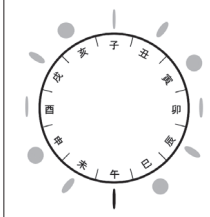
目睛一日三變、可定時候早晚。[23]

（目の瞳は一日三種の變化をし、時刻の早晚を定めることができる。）

このように、猫の瞳が一日に三種類の形に變化し、時刻の早晚を定められるとするイメージは、少なくとも清代においては、猫の特質として定着していたものと思われる。

「猫時計」の口訣の變遷について、鶴ヶ谷眞一氏は「猫の目についての細やかな觀察に基づいた言い傳えは、時代を經るにしたがって次第に體系化、というよりも圖式化されていったものらしい。[24]」と述べ、『本草綱目』の例に續けて、先に擧げた『琅邪代醉編』を取り上げ、「猫の目を三つの狀態に分けた『本草綱目』のものよりもさらに細かく、四つに分けている。[25]」と說明している。つまり三分說に續いて四分說が成立したと論じているが、說の前後關係については、『本草綱

表二　猫の瞳に關する觀察の變遷

▮＝「綖」、「線」　▮＝「棗核」　●＝「杏仁」　●＝「圓」、「滿月」			
			
圖A　『酉陽雜俎』	圖B　『埤雅』	圖C　四分説（『易經存疑』）	圖D　三分説（『本草綱目』）
［唐］段成式『酉陽雜俎』「貓、目睛旦暮圓、及午豎斂如綖」	［北宋］陸佃『埤雅』「貓眼早暮則圓、日漸午則狹長、正午則如一線爾」	［明］林希元『易經存疑』「子午線兮卯酉圓、寅申巳亥如棗核、辰戌丑未杏仁全」	［明］李時珍『本草綱目』「子午卯酉如一線、寅申巳亥如滿月、辰戌丑未如棗核也」

目』に先んじて、『易經存疑』に、四分説の口訣が見られるので、一概には言えないだろう。

鶴ヶ谷氏はさきほどの論點に基づき、四分説にあたる『琅邪代醉編』の記述をめぐってさらに、丑と寅、および未と申の位置を入れ替えれば、「對稱をくずすことなく、變化がよりスムーズに連續するはずなのだが、そうなっていないのはなぜだろう」[26]との疑問を提示した。

ここで一度、猫の瞳に對する觀察の變遷を、圖とともにまとめてみることにしよう（表二）。

圖Aおよび圖Bは、猫の瞳の形態はじっさいの觀察に基づいた結果だと思われ、瞳の形は黑色で表示している。圖Cにおいては、圖Aと圖Bに示されていない時辰の瞳の形を灰色で表示している。圖Dにおいては、「午」以外の瞳の形は、圖Aと圖Bのものとすべて異なるため、同じく灰色で表示している。

まず四分説（圖C）は、前代の觀察を受け繼いではいるが、そのほかの時辰、とくに夜間における猫の瞳の形態については、觀察ではなく、なにかしらのルールあるいは觀念に基づいて類推されたものであることは、間違いない。その觀念というのは、十二支を三つの組に分けるというものであろう。鶴ヶ谷氏が提示したように、四分説を表す圖Cを見てみると、確かに丑と寅、および未と申の瞳の形を入れ替えれば、形態の變化が「スムーズ」になるのみならず、より實際に近いものとなる。清末の文人兪樾の『茶香室續鈔』卷二十四には、かれがアレンジした「猫時計」の口訣が記されているが、それは、まさに「スムーズ」に連續するものである。さらに、兪樾はその『春在堂隨筆』において、弟子が行った「猫時計」説に對する檢證を細かく記錄している。この時、兪樾は瞳の形態と光の强弱との關係性に氣づき、夜間の形態はただ晝の場合から類推したものだと結論づけており、「猫時計」説を修正するに至った[27]。

兪樾のように「猫時計」説を檢證してみれば、とくに夜間における猫の瞳の形態が説通りに變化するのは不可能なことだと、すぐわかるはずである。にもかかわらず、舊來の「猫時計」説は明清代に流行した。しかも、そのもっとも知られていたパタンは「スムーズ」に變化するものでもなく、四分説でもなく、かえって觀察から大きく隔たった三分説（圖D）である。

鶴ヶ谷氏は、「猫時計」説の發想の根源について、次のように述べている。

……古代に起源をもつ陰陽五行説という、變現きわまりない森羅萬象を、陰陽二元の消長、および木火土金水なる五元素の循環としてとらえる中國獨自の世界觀との關連を、ここで考えることはできないだろうか。季節の推移や日々の運行を、さらには王朝の交代をも、こうした原理によるものと考えた中國人にとって、一日のうちに規則正しく消長をくりかえす猫の瞳は、そのような世界觀のごく身近な表れに思えたのだろう。[28]

これは、おおむね正しいだろう。ただ、十二支が具體的にどのような觀念に基づいて三つの組に分けられたのかは、「猫時計」説の核心となる問題であり、じつに難解である。それについて假説を提示する前に、「猫時計」説を日本人がこれまでどのように取り上げてきたのかについて、見ておきたい。日本の事例と比較することで、中國における記述の特殊性がより鮮明に浮かび上がるだろう。

四　「猫時計」説の日本における受容

慶長年間（一五九六～一六一五）、『本草綱目』などの漢籍が日本へと傳わり、日本側の文獻にも「猫時計」説に關する記述が見られるようになった。先行研究を踏まえつつ、あらためて整理して述べておこう。

早くは山岡元隣『古今百物語評判』（一六八三）に、猫の瞳に關する次のような記述が見える。

瞳の十二時にかはりて大小あるも氣味わろし。[29]

ここに見える記述は、『易經蒙引』と同じように、猫の瞳が十二時辰によって形態が變化するということを述べているものの、口訣についてはとくに記されていない。

また、「猫時計」の口訣が、日本の文獻に見られるようになった當初は、『本草綱目』や『琅邪代醉編』などの漢籍を引用するばかりであった。それらの中には、「猫時計」説を圖示している書物もある。たとえば、平住專庵編『分類故事要語』（一七一四）巻八と天野信景（一六六三～一七三三）『鹽尻』巻十二には、それぞれ次のような圖が見られる。

圖一　平住專庵編『分類故事要語』

圖二　天野信景『鹽尻』

殊意癡『白河燕談』（一七三〇）は、『西陽雜俎』や『本草綱目』の記述を引用しつつ、さらに日本風に「翻案」された口訣を記載している。

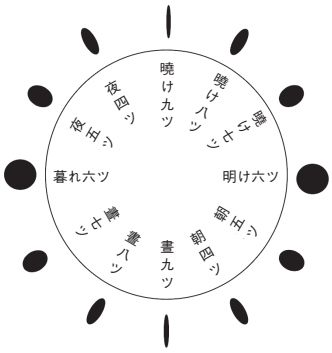
或カ歌ニ九ツト六ハイトスジ五八タマゴ七ツト四ハ滿月トシレ。[30]

喩える事物を日本のものに置き換えてはいるが、時間の區分の仕方については實質的に『本草綱目』の三分説と變わらない。[31]

やがて時間がたつにつれて、中國から傳來した「猫時計」の口訣に手を加えたものも、日本の文獻に見られるようになる。谷川士清『倭

訓栞』（一七七六）には、「猫の眼は十二時にかはり」[32]とあり、『西陽雜俎』の内容を引いた上で、「眼の歌」を次のように詠んでいる。

六ツ丸く四八瓜さね五と七と玉子なりにて九ツは針。[33]



圖三　谷川士清『倭訓栞』における「猫時計」説の表示圖

晝に限定しているかどうかは判然としないが、猫の瞳の形態變化は、丸いものから細くなり、ふたたび丸くなるといった流れとなり、スムーズに變化するものとして記されているようになっていることが注目される。それを圖示すると（圖三）、スムーズに修正された四分説とも言えるものになっている。このような變化の仕方は、實際の狀況により近いものとして日本人にイメージされていただろう。

さらに年代がくだると、一八二九年、梅川夏北（うめかわかほく）は『貓瞳寛窄辨（びょうどうかんさくべん）』という書物を書き上げた。本書は解剖學的な構造から、猫の瞳が時刻ではなく明暗に應じて變化するものであることを述べており、徹底的に「猫時計」説を否定するに至った。

この流れが示すように、「猫時計」説は中國から傳來したのち、日本で手を加えられ、その結果として、猫の瞳に關する記述は、實際の瞳の形態變化に對して、より忠實なものへと變わっていたように思われる。

このように、日本における事例を對置させると、中國では、猫の瞳の形態を「子午卯酉」、「寅申巳亥」、「辰戌丑未」の三つに分ける「猫時計」説が明清代を通じて流行し、實際の觀察結果を無視し續けていたことがわかる。このような三分説を支えてきた觀念とはいったいいかなるものだったのだろうか。

五　「猫時計」説における十二支の仕組み

「猫時計」説は、當初の素朴な觀察から、最終的に事實とかけ離れた煩雜な理論へと生まれ變わった。「猫時計」説における「子午卯酉」、「寅申巳亥」、「辰戌丑未」といった十二支の配列は――實際の觀察に依據するものでないとなれば――新たに作られたものではなく、既存の何かしらの理論あるいは觀念に當てはめたものと考えるのが自然だろう。

「猫時計」の口訣が最初に易類の書物に登場したことと、それが明清代の通書や日用類書に廣く收錄されていること、つまり記載されている文獻の性格からみれば、「猫時計」説が「占い」と關係していることが推察される。「猫時計」説を支えるその觀念については、これまで問いとしては取り上げられてこなかったが、ここで、術數の「奇門遁甲」と關係しているのではないかという假説を提示したい。

「三式」[34]としての遁甲は、傳説では、その起源は黃帝とされるが、「遁甲」なる言葉は、『後漢書』「方術傳」に初めて見える。遁甲は、隋の時代において、すでに相當に流行していた。[35]その關連文獻は、『四庫全書總目』子部・術數類に分類されており、『遁甲演義』、『奇門遁甲賦』、『奇門要略』など數種が收められている。

「奇門遁甲」は明清時代においては、『三國演義』などの通俗文學作

品にもよく見られる。かの赤壁の戰いで諸葛孔明は「東風を借る」際に、周瑜に次のように話している。

亮雖不才、曾遇異人、傳授奇門遁甲天書、可以呼風喚雨。[36]

（私、菲才にはございますが、かつて異人と出會い、奇門遁甲の天書を傳授していただき、風雨を呼ぶことができます。）

このくだりは正史には記載が見られず、そこに奇門遁甲が登場していることは、その考え方が明清時期の人々に馴染みのあるものだったことを示しているだろう。

奇門遁甲は、端的に言えば、「天の時」「地の利」「人の和」を合わせて、複雜な推算を通じ、吉凶や戰略を決定する根據に用いられ、方位學と干支學、つまり空間と時間を統合した術數の學である。[37]そして、二十四節氣を十干十二支に結びつけ、時間を六十に分割するというのは、奇門遁甲の基本的な時間要素であった。[38]

奇門遁甲におけるもっとも重要な時間觀念のひとつに、「一氣三元」がある。[39]「一氣三元」の「氣」とは「節氣」のことであり、一節氣には上元、中元、下元といった三つの元がある。奇門遁甲を概述する宋代の『煙波釣叟歌』[40]は、作者不明だが、ほとんどの奇門遁甲の書物に引かれているもので、そこには「一氣三元」に關する次のような記述がある。

……一氣三元人莫測。五日都來換一元……[41]

（一節氣の三元は、人には測れない。五日間をもってみな一元に換える）

そして、日にちを示す干支が、具體的に三元のどの元にあたるのかについては、それを簡潔に示す口訣がある。宋代の岳珂の作とされる『奇門遁甲元機』には、次のような説明が見える。

一節分三元。子午卯酉爲上元、寅申巳亥爲中元、辰戌丑未爲下元。[42]

（一節氣は三元に分けられる。子午卯酉は上元、寅申巳亥は中元、辰戌丑未は下元。）

これに續けて、もし三元がわからなければ占うことができないといった説明も見られる。六十の干支が、それぞれどの元に振り分けられるのかについては、『奇門遁甲元機』に示されている。

それを表にまとめると、表三のようになる。

表三　奇門遁甲における「一氣三元」の分け方

上元	甲子	己卯	甲午	己酉
	乙丑	庚申	乙未	庚戌
	丙寅	辛巳	丙申	辛亥
	丁卯	壬午	丁酉	壬子
	戊辰	癸未	戊戌	癸丑
中元	己巳	甲申	己亥	甲寅
	庚午	乙酉	庚子	乙卯
	辛未	丙戌	辛丑	丙辰
	壬申	丁亥	壬寅	丁巳
	癸酉	戊子	癸卯	戊午
下元	甲戌	己丑	甲辰	己未
	乙亥	庚寅	乙巳	庚申
	丙子	辛卯	丙午	辛酉
	丁丑	壬申	丁未	壬戌
	戊寅	癸巳	戊申	癸亥

周知のように、十干十二支は六十の組み合わせを生み出し、一つの循環を以て年、月、日、時を表す。甲子から始まり、乙丑、丙寅……癸亥で終わる。表三に示されるように、一縦列は一節氣を表しており、それぞれ三元に分かれている。つまり、六十干支のひとつの循環においては、三元はそれぞれ四組あることになる。組ごとの最初の干支は「符頭」と呼ばれ、一元の始まりを意味する。

この分け方によれば、符頭は、かならず十干の「甲」あるいは「己」にあたる。その並び順について、上元を例にとって説明しよう。本來ならば、その順番は「甲子、己卯、甲午、己酉」のように、六十干支の順で配列されるのがもっとも一般的であろう。ここから、確定されている十干の「甲」と「己」を取り除くと、「子、卯、午、酉」となる。しかしながら、さきの『奇門遁甲元機』の口訣では、「子午卯酉は上元」だと述べており、「午」と「卯」の配列順が逆になっているのである。

じつは、この符頭の並び順は、六十干支の順番ではなく、先に十干、次に十二支といった順で並んでいる。つまり、「甲子、甲午、己卯、己酉」のように並ぶということである。ここから、「甲」と「己」を取り除くと、「子午卯酉」となる。中元の「寅申巳亥」と下元の「辰戌丑未」もまた同様である。

一元には五日間がある。そして、一日にはさらに十二時辰がある。つまり、一元は六十時辰から成るということになり、これもまた一つの循環となる。このように考えてゆくと、「一氣三元」における「子午卯酉」「寅申巳亥」「辰戌丑未」といった分け方が、そのまま一日十二時辰にまで適用されたのかもしれない。

奇門遁甲はそもそも河圖洛書などの傳統的な時間觀念を受け繼いでいるため、「一氣三元」という概念は、さらに深い根源から育まれてきたものかもしれない。先秦時代の「日書」には、日選びが早くも「辰、戌、丑、未」に集中する傾向がある。[43] 十二支について、[明]王圻『三才圖會』「洛書生十二地支圖」には、次の説明が見える。

子午卯酉得天陽之數而居四正、寅申巳亥辰戌丑未得地陰之數而居四隅。(略)辰戌丑未爲土無定位寄居四隅。[44]

(子午卯酉は天の陽數を得て[北、南、東、西]四つの方位に居り、寅申巳亥辰戌丑未は地の陰數を得て[北東、南西、南東、北西]四つの隅に居る。(中略)辰戌丑未は土[という性質]とされ、決まる方位がなく、四つの隅に寓居する。)

このように、十二支にはそもそも各自の性質がある。「猫時計」説を支えている十二支の仕組みは、中國人がどのように時間を捉えているのか、という疑問を解くための鍵となる。ここまでの考察を踏まえると、「子午卯酉」「寅申巳亥」「辰戌丑未」の三組は、それぞれが一元の始まりを表しており、時間を區切るという機能があるように思われる。「猫時計」説における十二支の配列もまた「一氣三元」のように時間を區切る考え方の影響下にあったと思しい。三分説の口訣が徐々に主流となっていったのも、このような考え方が背景にあったのではないか。

六　おわりに

本稿では、明清時期に流行した「猫時計」説が、陰陽の變易や自然

の攝理を反映する占術と、より近しい關係を有するものであることを示した。つまり中國人は、實際の觀察ではなく、觀念上の時間のあり方を選んだというわけである。そして、「猫時計」說の「子午卯酉」「寅申巳亥」「辰戌丑未」といった十二支を三つに分ける考え方は、術數「奇門遁甲」における「一氣三元」のような、時間を三つに區切るという、おそらくは中國文化の處々に遍在するであろう、ある種の力學の影響下に成ったという可能性を提示した。

注

（1）［明］李時珍『本草綱目』（金陵初刻本影印本、科學技術出版社、一九九三年）卷五十一。

（2）渡部義通『猫との對話』（文藝春秋、一九六八年）、一二〇頁を參照。

（3）平岩米吉『猫の歷史と奇話』（動物文學會、一九八五年）第二章「猫股傳說の變遷」、今村與志雄『猫談義　今と昔』（東方書店、一九八六年）二一「猫の瞳に天地が―朝鮮の文人とネコ」を參照。

（4）田中貴子『鈴の音が聞こえる　猫の古典文學誌』（淡交社、二〇〇一年）第七章「猫神由來」を參照。

（5）鶴ヶ谷眞一『猫の目に時間を讀む』（白水社、二〇〇一年）七「猫の目に時間を讀む」を參照。

（6）拙稿「「猫時計」研究―中國人は猫の瞳に時刻を讀んだか」（『饕餮』第二十六號、中國人文學會、二〇一八年九月、二～十九頁）において、「猫時計」說自體は、清代には民間に廣く流布していたが、實のところ、時計として用いるのは一般的な習慣ではなかったという可能性を示した。また、科學知識の傳來のもと、「猫時計」說は民國においては非難の的となり、徐々に姿を消していったことを明らかにした。

（7）前揭今村與志雄『猫談義　今と昔』第一章「緣起」、四頁を參照。

（8）［唐］段成式『酉陽雜俎』續集、卷八「支動」。「支動」は、動物類の續編を意味する。日本語譯は今村與志雄譯注『酉陽雜俎』（平凡社、一九八〇年、第五册、一二二頁）を參照。現存する『酉陽雜俎』の刻本は「脉望館本」「津逮本」「學津本」の三種であり、いずれも「目睛暮圓」とする。ただし、今村譯注本および許逸民『酉陽雜俎校箋』（中華書局、二〇一五年）の校記によれば、『太平廣記』、『太平御覽』、『類說』などにおいては、該當箇所は「目睛旦暮圓」とする。いま『太平廣記』にしたがい、「旦」を補うこととする。

（9）方南生「『酉陽雜俎』版本流傳的探討」（『福建師大學報（哲學社會科學版）』一九七九年第三期、六七～七四頁）を參照。

（10）［北宋］彭乘『墨客揮犀』（嚴一萍選輯『百部叢書集成：原刻景印』集成之十四）［明］商濬輯『稗海』（藝文印書館、一九六五年、所收）卷一。

（11）［北宋］陸佃『埤雅』（嚴一萍選輯『百部叢書集成：原刻景印』集成之八十三）［明］郎奎金輯刊『五雅全書』（藝文印書館、一九六七年、所收）卷四、「猫」。

（12）その初期の事例は前稿でも言及したが、本稿の中心的論題と關わるため、少し詳しく紹介することとしたい。

（13）［明］蔡清『易經蒙引』（王雲五主持『四庫全書珍本』四集、商務印書館）卷一上。

（14）［明］林希元『易經存疑』（王雲五主持『四庫全書珍本』三集、商務印書館）卷十一。

（15）坂出祥伸『中國古代の占法：技術と呪術の周邊』（研文出版、一九九一年）、三七頁を參照。

（16）［明］張鼎思編、陳性學等校『琅邪代醉編』（『和刻本漢籍隨筆集』第

七集、汲古書院、一九七八年、所收）卷二十四「別畫」、三五〇頁。

(17) ［清］黄漢『猫苑』（『筆記小說大觀』第二十五册、江蘇廣陵出版社、一九八三、所收）、一九〇頁。

(18) 三浦國雄「通書『玉匣記』初探」（『人文學報』第八十六號、京都大學人文科學研究所、二〇〇二年三月、一～二四頁）を參照。

(19) 『張果星宗』（陳夢雷編『古今圖書集成』、文星書店、一九六四年、「藝術典星命部」卷五百六十七、所收）「猫眼辨時」。『玉匣記』については、廣盛堂刊本『增補選擇通書廣玉匣記』や上海千頃堂石印本などの古い刊本のみならず、『增補玉匣記』（内蒙古人民出版社、二〇一〇年）、『增補萬全玉匣記』（中醫古籍出版社、二〇一二年）など、現代において流通している『玉匣記』諸本もまた三分說を載せている。

(20) 坂出祥伸、小川陽一編『三台萬用正宗』（汲古書院、二〇〇〇年）第一册、一三一頁。

(21) 周玉泉口述、龔克敏整理『玉蜻蜓』（江蘇文藝出版社、一九八五年）に確認できる。『玉蜻蜓』における「猫時計」說の事例について、詳しくは前掲拙稿「「猫時計」研究—中國人は猫の瞳に時刻を讀んだか」を參照されたい。

(22) 李蕙珠「倚蓉室野乘」（『眉語』第一卷第二號、一九一五年二月、一頁）、蓮碧「天然計時鐘之利用」（『申報』、一九二二年五月五日、第二〇版）、復林「童子軍智囊」（『兒童世界』第十三卷第一期、商務印書館、一九二五年一月、九七頁）などが擧げられる。

(23) 袁傑主編、故宮博物院編『清宮獸譜』（故宮出版社、二〇一四年）「猫」、一〇六頁。

(24) 前掲鶴ヶ谷眞一『猫の目に時閒を讀む』、五八頁。

(25) 同上、五九頁。

(26) 同上、五九頁。

(27) 前掲拙稿「「猫時計」研究—中國人は猫の瞳に時刻を讀んだか」、八～一一頁を參照。

(28) 前掲鶴ヶ谷眞一『猫の目に時閒を讀む』、七六頁。

(29) 山岡元隣『古今百物語評判』（立川清校訂『續百物語怪談集成』、叢書江戸文庫二七、國書刊行會、一九九三年）百物語評判卷之三。

(30) 殊意癡『白河燕談』（永田調兵衞、一七三〇年）卷三、「猫」。

(31) 齊藤國治『日本・中國・朝鮮　古代の時刻制度　古天文學による檢證』（雄山閣出版、一九九五年）、二八四～二八五頁によれば、江戸時代には、「不定時法は明け六ツ（夜明け）と暮れ六ツ（日暮れ）の二時點をおさえてこれで1日を二分し、前者を晝の初め、後者を夜の初めとする。晝の時閒を6等分して、各部分の起點を明け六ツ、朝五ツ、朝四ツ、晝九ツ、（すなわち眞正午）、晝八ツ、夕七ツとする。夜の時閒も6等分して各部分の起點を暮れ六ツ、夜五ツ、夜四ツ、曉け九ツ（すなわち眞正子）、曉け八ツ、曉け七ツと名づける」という。

(32) 谷川士清『倭訓栞』（篠田伊十郎、一八三〇年）卷二十二。

(33) 同上。

(34) 三式は、それぞれは太乙式、遁甲式、六壬式であり、式占の總稱としても用いられる。

(35) 猪野毅「奇門遁甲の基礎的研究」（北海道大學大學院文學研究科『研究論集』第一〇號、二〇一〇年十二月、一六一～一八四頁）を參照。

(36) ［明］羅貫中『三國演義』第四十九回「七星壇諸葛祭風　三江口周瑜縱火」。

(37) 前掲猪野毅「奇門遁甲の基礎的研究」を參照。

(38) 劉國祥「淺議『奇門遁甲』的時空思維」（『文化與傳播』二〇一五年第

一期、四九～五二頁）を參照。

（39）同上。

（40）「煙波釣叟賦」「煙波釣叟訣」とも言う。

（41）『奇門遁甲元機』（華陽逸叟輯『清隱山房叢書』、一八八三年）「奇門遁甲煙波釣叟歌」。

（42）同上。

（43）王光華、李秀茹「試析秦簡『日書』辰、戌、丑、未四季土」（『求索』二〇〇六年第九期、二〇四～二〇六頁）を參照。

（44）［明］王圻『三才圖會』（明萬曆王思義校正本影印、上海古籍出版社、一九八八年、八九五頁）時令一卷。